

# 東北解放軍医療隊で活躍した日本人

——ある軍医院の軌跡から——

鹿 錫 俊

はじめに

1. 「東北根拠地」建設と日本人徴用の理由
2. 入隊に至った三つのケース
3. 初期における概況
4. 東北共産党の日本人政策
5. 思想教育と日本人の変化
6. 遼瀋戦役と「満員入関」
7. 職位の評定と新米中国人医療者に対する指導
8. 南下作戦期の試練
9. 中華人民共和国成立後

終わりに

## は じ め に

中国の現代史において、1945年から1953年までの8年間は国民党政権を覆すことを目標とする「旧中国の解放期」と、中華人民共和国の基礎を築くことを中心とする「新中国の建国期」に跨る過渡期であった。他方、中国共産党にとって、この過渡期の勝敗を決した要因に、中国の東北部すなわち旧日本支配下の「満州国」地域を基盤とした根拠地建設と、それを力の源泉とした「東北解放軍」と通称される中国共産党軍の一部である部隊<sup>1)</sup>の作戦をあげなければならない。要するに、中国では1945～1953年の8年間が中国現代史の重要な時期として、またこれとあいまって東北解放軍は最も重要な貢献を果たした部隊として評価されたのである。

こうした大切な時期に、このように高い評価をうけた部隊に、戦士として参加し、中国人の戦友とともに北の黒竜江省から南の海南島まで進軍し、中国の革命に自らの汗と血を捧げた日本人がいた。その中では、軍の医療隊で働いた日本人が最も多く、筆者の調査ではその人数が通説<sup>2)</sup>の倍を超え7000人台にのぼるとする原資料も確認された<sup>3)</sup>。

本稿は、「東北解放軍に留用された日本人」をテーマとする研究プロジェクトの中間報

告として、まず東北解放軍所属の多くの軍医院の中の一つに焦点を当てて追跡し、これを縮図として医療戦線で活躍した日本人の活動全般を垣間見ることがを試みる。

この軍医院は1946年に東北解放軍遼東軍区第1後方医院として発足し、1948年に第29後方医院、1949年に第9後方医院にそれぞれ改名されたのであったが、読者の混乱を避けるため、本稿ではその経緯を明記するとともにそれを「A医院」という仮称で記述し、関係者の敬称を全て省略することにする。また、テーマそのものの微妙さもあり、継続中の調査に支障を来さないように、未公開資料の直接の引用はできるだけ控え、主として中国で公刊されたものを用いることとした。なお、原記録の多くが中国の「文化大革命」時期に処分または紛失したので、現段階では当事者の回想録やインタビューに頼るところが大きかった。

## 1. 「東北根拠地」建設と日本人徴用の理由

8年にわたる抗日戦争（日中戦争）が日本の敗戦によって決着した直後、中国共産党の軍隊は「東北根拠地」の建設を目的に、1945年8月中旬から次々に旧日本支配下の「満州国」地域に進軍し、「東北人民自治軍」として活動を開始した。翌年の1月、中国共産党指導部はこの軍隊を「東北民主聯軍」に改名した。これに伴って、遼東地区に駐在した軍の一部は東北民主聯軍の遼東軍区を構成し、本溪の宮原に司令部を設けた。

中国共産党の軍隊は抗日戦争中、日本軍による掃討と国民党政府軍による抑圧という二重の苦境の中で発展してきた軍隊であるため、医療隊員は従来から極めて不足していた。これに加えて、東北への進軍は国民党政府軍との一刻を争う状態での緊急出動であるので、戦闘部隊の進撃を優先し、医療隊などの後方支援部隊は後回しにせざるを得なかった。したがって、もともと不足している医療隊員はますます不足してしまったのである<sup>4)</sup>。例えば、遼東軍区衛生部という医療を統轄する部門は、元山東軍区衛生部の一部の職員と衛生学校の60名の学生のみで構成されていた<sup>5)</sup>。さらに、抗日戦争中のゲリラ的な戦闘と異なると、東北での中国共産党軍と国民党政府軍との戦闘は大規模な軍隊による正規戦であるから、戦闘のたびに大量の死傷者が出た。例えば、東北民主聯軍遼東軍区が創設された翌月、国民党政府軍が瀋陽から遼東半島を掃討してきたことに対して、遼東軍区の第3、第4縦隊は阻止するために沙嶺子（現、遼寧省盤山県東南部）で激しく応戦したが、短期間で戦傷者5000人余、凍傷者2000人余、病者1500人余を出してしまった。これらの傷病者は一気に列車で本溪に運ばれたため、この戦闘の直前に成立したばかりで、200～300の病床しかなかった遼東軍区衛生部は直ちに「どうすることもできない」危機に陥った<sup>6)</sup>。

当時、「このような困難な局面は満州の南北を問わず普遍的に存在していた」<sup>7)</sup>。東北民主聯軍にとって、こうした危機を打開するためにはとりあえず東北の各地で日本への送還を待っている日本人を活用するしかなかった。なぜなら、戦闘要員は現地の農民や国民党軍の捕虜から比較的簡単に補充できたのに対して、医療要員は一定の技術と文化水準を必

要とするので、中国人よりも日本人のほうが適応できると思われたからであった<sup>8)</sup>。そして、この必要性和同時に、敗戦国の残留民という弱い立場に陥った日本人が動員しやすいとも考えられただろう。

このような背景の下で、沙嶺子戦役の直後、遼東軍区衛生部は旧日本系の医院を接收して、それを主体とした八つの軍医院を新設した<sup>9)</sup>。その中、本稿の研究対象であるA医院は、日系煤鉄会社の宮原医院を元に、第1後方医院として設立されたのである<sup>10)</sup>。ちなみに、この時期では遼東に限らず、全東北部の共産党軍隊にわたって全て日本人を医療隊の中堅として用いた。その状況について、東北共産党軍の医療責任者である賀誠衛生部長は1948年1月の報告において次のように回顧した。

「当時の軍医院において、80%以上の要員は旧敵（日本）、偽（「満州国」）の医院の人であった。一つの医院に対して、我々はせいぜい院長一人を送ることしかできず、場合によっては軍事代表を一人派遣するだけである。しかも能力もそれほど高くなく、日本人を管理する経験もなく、技術においては日本人を把握することができなかった」<sup>11)</sup>。

## 2. 入隊に至った三つのケース

軍の後方医院の設立に伴って、遼東軍区衛生部は医療要員を補充するため、日本人の大量徴用を始めた。日系医院とともに接收された日本人とこうした新たに徴用された日本人とをあわせると、日本人が益々各軍医院の主体となった。特にA医院所在の南満地方では、当時東北の中国共産党の主要責任者の一人である陳雲が次のように懸念したほど日本人が多かった。

「南満では医師と看護師は全員日本国籍の人であり、どっちみち帰国することに決まっている。自分で必要な医師と看護師をそろえなければ、必ず大問題に陥る。くれぐれも油断するな」<sup>12)</sup>。

これは東北の中国共産党軍隊における日本人医療要員の重要さを裏付けたものである。

ところで、A医院の関係者の回想などをまとめると、中国共産党の軍医院に入隊した日本人は概して下記の三つのケースに分けられる。

第一に、もともと日系の医院で働き、医院とともに東北民主聯軍に接收されたケースである。これは自明なので、具体的な経緯は省略する。

第二に、軍医院の創設後、現地の日本人組織を通して強制または半強制的に徴用されたケースである。看護婦として入隊した広田斐子は言う。「敗戦の翌年2月、本溪市の日本人隣組組織の人が『八路軍の医院でお手伝いが要るから、お宅からも一人の娘を出せ』と言ってきたので、私はそのままに連れて行かれてしまった。間もなく、部隊が直ぐ移動しなければならないといううわさが広がり、徴用された日本人は泣いたり騒いだりしたが、どうにもならなかった」<sup>13)</sup>。

同じく看護婦として入隊した阪井光子のケースは次のようなものである。「家は本溪湖

にあり、父は中支派遣軍の将校で、南方の作戦に行かされた。弟が一大連の学校にいる。ソ連軍が進駐してきた後、鉄道が破壊されたので、彼らは帰れなくなった。その間、私は日本人隣組組織から『八路軍の医院のお手伝いにいけ』との指示を受け、訳の分からないまま、集合場所に行かされた。あそこでは中国人の幹部以外、全て日本人であり、医師や看護婦（日本赤十字、陸軍の看護婦）もいた。中国人がとても親切なので、やっと安心した」<sup>14)</sup>。

また、国民党軍の進攻により遼東軍区の部隊が南へ移動していく途中、各軍医院は病舎の建築や負傷者の輸送をはかるため、各地で相次いで日本人の男子を徴用し、雑務や担架係に当たらせた。たとえば、門屋敏夫の回想によると、1946年8月に中国共産党軍が日本の会社や居留民会を通して日本人男子を徴用した。その際、「通化市二道江区の日本人居留民会の会長は若者を集めて、大栗子の解放軍医院の建設工事に参加させた。工事は旧満州製鉄の職員住宅と労働者宿舎を病室に改修するものであった。仕事はたいへんきつかったが、みんな忍耐強くがんばった。間もなく、前線から傷病者が運ばれ、医院も動き始めた。我々は毎日毎日貨物列車の荷物卸しや食糧の運搬などの雑務に明け暮れた。そのうち、二道江にいる日本人の帰国が始まったので、我々はこの待ちに待った日の到来を喜んだ。しかし、医院側は医療要員が不足しているのを理由に我々の帰国を許容してくれなかった。我々は不満を持ちながらも残らざるを得なかった」<sup>15)</sup>。門屋はその後炊事係や看護助手としてA医院で働いていた。

第三に、生計を立てるため自ら入隊したケースである。日本軍の崩壊や日系企業の操業停止などにより、敗戦後東北に残留した日本人のほとんどが生計の糧を絶たれた。そのうえ、進攻してきたソ連軍が鉄道沿線の日系企業を接収したり、工場の設備をソ連に移したりして日本人の住宅や財産を奪ったため、残留日本人は窮境に陥ってしまった。こうした窮境から脱出するため、一部の日本人は自ら中国共産党の軍隊に入隊した。1946年10月に安東で入隊した高橋貞夫は次のように回想する。「敗戦当時、私は安東市に住んでいた。中国語がぜんぜん話せず、親戚も友人もいないので、途方にくれていた。悩みと不安の中で長い時間を過ごすしかなかった。しかし、どんなに劣悪な状況に陥っても生計を維持していかなければならないので、私は豆腐を作って街で売っていた。その辛さは想像もできないほどだった。1946年春、鳳城—寛甸の間の鉄道工事が作業員を募集しはじめたので、私は応募した。10月末に工事が終わった後私は安東に帰った。だが、実際6月から我々は一銭の給料ももらえず、乞食のようになってしまった。工事監督の日本人に給料を全部持ち逃げされたからである。こうした中、東北民主聯軍の制服を着用した軍隊が車で我々を待っていた。指揮官らしき人が、皆さんに非常に同情していると前置きをしてから、短期間でも構わないが、若い男性に手伝ってもらいたい。担架で傷病者を運ぶ仕事だ、と要請した。我々の一部は動揺した。日本人の送還が始まったことを知っているからである。しかし、我々は相談しあったうえ、命の保障、後方での短期間の仕事、帰国の優先権の確保

などを条件に、50人前後の有志を出した。軍の指揮官に率いられて、我々は配られた新しい衣服を着て、おいしい食事を腹いっぱい食った。心配もなくなった。こういう方法しか生きていられないことを意識したからである」<sup>16)</sup>。

以上の三つのケースとは別に、中国共産党の革命に惹かれて進んでそれに献身しようとして入隊した人もいたという<sup>17)</sup>。しかし、A医院の事例から、これはごく少数の例外に過ぎず、上記の三つのケースこそ大勢であったといえよう。

### 3. 初期における概況

A医院が創立して間もなく、国民党軍は南満地区に対する侵攻戦をしかけてきた。こうした圧迫を受けた東北民主聯軍は戦いながら後退し、本溪、安東、通化などの地区を相次いで放棄して1946年10月に臨江に撤退した。他方、軍の医院は戦闘部隊に先立って移動し、多くが朝鮮半島に撤退したが、A医院は敵軍が安東を占領した後に長甸溝口から北上し、臨江以東の八道溝（現、長白県内）に移動した<sup>18)</sup>。

1946年10月30日から11月2日までの間、東北民主聯軍は鳳城で「新開嶺戦役」を敢行し、国民党軍第25師の8900人を殲滅した。しかし、東北民主聯軍自身も大きな損失を被った。そのうえ、「この戦役は臨時に決定されたため、戦前の準備が不十分で、傷病者を運ぶ能力が低かった。1700人余りの負傷者の大多数は捕虜に頼って担架で運ばれたのであった」<sup>19)</sup>。前記の高橋貞夫ら徴用されたばかりの日本人もこの戦役に出会った。高橋はそれを次のように回想した。「我々は4人一組で負傷兵を運び始めた。私は山崎、後藤、和気と一緒に劉という連長を運んだ。我々の肩は重い担架によって腫れた。11月の厳しい寒さと激しい疲れのなか何日間も歩き続けた。目的地の医院に着いた後、連長は私たちの手を握って泣いてしまった」<sup>20)</sup>。これをきっかけに、高橋らはA医院に残り、炊事係として働き始めた。

1947年1～4月は南満の臨江防衛戦の時期であった。厳寒のうえに衣、食、薬ともに極めて不足し、医療面での東北民主聯軍の困難がいっそう深刻になった。この際、体の弱い日本人看護婦は結核などの病に罹って亡くなった。A医院の藤崎成枝、天井洋子、田中静江、桜井恭子らもこの時期に命を落としたのである。彼女達でいちばん若いのが17歳で、一番年上の人でもまだ22歳に過ぎなかった。また、医師の新宅弘、看護長の小助川隆三もこの時期に亡くなった。A医院で彼らは中国の解放戦争に命を捧げた最初の日本人医療要員であった<sup>21)</sup>。

死と背中合わせの前線での救護活動はもちろん、医院の中での仕事も大変だった。門屋敏夫は、A医院第3所炊事係として勤めた時期のことを次のように語る。「医院は丘の上にあるため、われら若者は毎日、谷から丘へ水を運ばなければならない。バケツを担いで凍結した小道を一步一步登っていくが、ちょっと滑ると谷へ転落することになる。一日に百回以上も往復しなければならないので、肩が赤く腫れた」<sup>22)</sup>。

仕事以上に苦しかったのは負傷兵の規律の悪さであった。入院中の負傷兵は負傷したことによる暗い精神状態に加えて、かつての敵国民への恨みもあって、日本人医療要員を「鬼子」や「捕虜」として罵ったり、殴ったりして各医院で度々大混乱を起こした。A医院においては、「軽症患者までが日本人看護婦に洗面の湯を運ばせ、大小便をとらせ、マッサージから食事万端、重症患者なみの看護をやらせている」、「傷病員の機嫌を損ねると皮帯で殴られる」<sup>23)</sup>。

以上の諸要因を背景に、この時期、軍医院にいる日本人の多くは帰国を希望し、仕事をしても安心できなかった。A医院では、炊事係の元木和男が帰国を許してくれない医院上層部への抗議を示すため、米鍋に故意に砂を混ぜて、負傷兵と大騒ぎを起こした<sup>24)</sup>。また、日本人による怠業や抗議活動も多発し<sup>25)</sup>、時には脱走を図る人まで現われた<sup>26)</sup>。

#### 4. 東北共産党の日本人政策

日本人が東北民主聯軍の諸医院の主体となっているだけに、日本人の動揺を克服し、その士気を高めることは軍の医療、引いては作戦の成否を決する緊要な課題となった。そのため、東北の共産党指導部は1946年の半ばからこの課題の解決に力を注ぎ始めた。

まずは同年9月に、東北民主聯軍は日本人要員に対する政策を具体的に定めた。主な内容は次のとおりである。

第一に、二つの間違った偏向を克服すること。一つは、日本人を敗戦した捕虜と見なし、強制的な態度で対応し、または日本人の生活に必要な配慮を与えず、その人格を尊重しないという「左」の偏向である。もう一つは、日本人を甘やかして、その行過ぎた要求にも無原則に妥協するという右の偏向である。この二つの中、「左」の偏向はこれまでの主なるものであったから、一刻も早く改めなければならない。

第二に、次の諸点から生活の面で日本人に気を配ること。

①日本人医師とその家族の食事面の待遇は中国人医師と同等にする。

②日本人への報酬を月ごとに、可能であれば半月ごとに払う。未払いの報酬は速やかに補う。

③家庭に困難があった技術者に配慮を与える。家族との同居を希望する人に対してはできるだけその家族を迎えて叶わせる。日本人同士の結婚は、仕事に支障がでない限り原則として許可する（筆者注：当時の解放軍の規律では中国人兵士の結婚は禁止されていた）。

④病気にかかった日本人を親切に慰める。

⑤可能な限り日本料理を提供する。

第三に、次の諸点から日本人の人格を尊重すること。

①中国人の風習を妨害しない限り、日本人が自らの民族的習慣を保つことを容認する。

②親切で誠意を込めた態度で対応する。

③日本人女性にわいせつな行為をしない。

④日本人に暴言暴行をしない。

第四に、日本人の技術を重視し、それを高めること。

①熟練した技術をもつ人材（医師または看護師）を重視し、謙虚に彼らから学び取る。

②技術力が低い、あるいは医療態度が悪い（いい加減な診察や消毒、介護など）、無責任な態度をとった日本人を厳粛に批判し、その誤りを是正し、その技術力を高める。しかし、決してこれらの人を蔑視したり憎悪したりすることはしない。

第五に、時を移さずに日本人の仕事に対する点検と指導を行うこと。

①定期的に会議を開き、活動を報告する制度を確立し、それぞれの仕事振りを点検し、改良をはかる意見を発表させる。

②昇格・降格の制度と賞罰の制度を実施し、模範的な行為を広げ、劣者を戒める。

③技術が未熟で能力の低い人を定期的に訓練し、その能力を高める。

第六に、日本人の思想を改造し、特に次の問題点を克服させること。

①日本の敗戦の要因に対する認識の無さ。

②天皇制に好感を持つこと。

③東北民主聯軍の力に対する軽視と不信感。共産党と国民党の是非を区別できぬこと。

④仕事に専念できず帰国を要求すること。

⑤雇用満期後の留任に不満を持つこと<sup>27)</sup>。

そして、1946年末、負傷兵の規律の悪さが日本人の動揺と不安を招いた最大要因だという認識から、軍の衛生当局は負傷兵の規律の向上を急務として取り組み始めた<sup>28)</sup>。1947年1月15日に、東北民主聯軍総司令の林彪は「負傷兵士へ」と題する命令を出し、暴言暴行の禁止、医師の指示への服従をはじめ、負傷兵が守らなければならない六カ条の規律を定めた<sup>29)</sup>。この命令を貫徹するために、同年1月25日、東北民主聯軍の衛生当局は「傷病者管理委員会および活動条例」<sup>30)</sup>を定め、各医院で選挙によって入院者から「傷病者管理委員」を選出し、規律の整頓や紛糾の調停などの活動に当たらせた。こうした負傷兵による自己管理の措置は相当な効果をもたらしたという<sup>31)</sup>。

日本人に対する管理はもともと中国人幹部によって行われたが、言葉が通じないことが大きな障害となり、お互いの意見疎通がうまくいかず、しばしば誤解を招いた。これを解決するために、1947年の後半から、日本人に対しても日本人による自己管理が実施された。具体的には、日本人の中の優秀者を選抜して「民族幹事」に任命し、医院長の指示を受けながら日本人の管理を担当するということである<sup>32)</sup>。

上記の一連の政策と措置が奏効したため、医師、看護師への傷病者の暴行暴言などが徐々に収まり、日本人医療要員の人格も尊重されるようになった<sup>33)</sup>。日本人の多くもこの変化に深い感銘を受け、軍医院での活動の態度を改善した。

## 5. 思想教育と日本人の変化

1947年4月の臨江防衛戦の終了に伴って国民党軍の侵攻は阻止された。東北民主聯軍は短期間の調整を経て同年5月から夏季攻勢を開始した。そのうち、南満地区では東北民主聯軍の部隊は全面的な反撃戦を展開し、吉林省の要衝である梅河口を占拠した後、北満地区の部隊と合流して四平を制圧した。この戦闘によって、南満における遼東、安東、遼南という共産党軍の三つの根拠地は一つにつながり、情勢は好転し始めた。これに伴って、八道江に駐在したA医院は第4後方医院の一部を併合して、6月には様子哨に、10月には五道江に移動して秋季攻勢に参加した。

1948年1月、中国共産党は東北での自軍の名称を「東北民主聯軍」から「東北人民解放軍」に改めた。その翌月に、A医院は遼南の岫岩に移動し、冬季攻勢に参加した。この戦闘の後、A医院は4月末に岫岩を離れ、梅河口南西部にある山城鎮に北上し、そこに半年間駐留した。その間、5月に東北人民解放軍は軍医院の番号を統一的に再編成し、A医院は遼東軍区第1後方医院から第29後方医院に改名され、劉御が院長に任命された<sup>34)</sup>。

こうした比較的安定した時期を利用して、A医院は発展を目指す一環として、日本人を含む全員に対する思想教育を強化し始めた。まずは「憶苦思甜（過去に受けた苦痛を思い出し、現在の幸せをかみしめる）」という教育である。劉御院長はその進め方を次のように要約した。国籍を区別せず、指揮官と兵士を区別せず、全ての人は自身および家族が体験した搾取と圧迫による苦しみを語り合い、さらに、事実に基づいて封建地主階級と資本家階級の搾取を批判する。これを通して、天下の被搾取者はみんな友人であることを認識し、中国人と日本人がお互い手を結んで、傷病者に奉仕することに力を尽くすようになった<sup>35)</sup>。

1948年5～6月には「三査三整」運動が進められた。「主な内容は、階級を調査して思想を整頓し、仕事ぶりを調査して医療に対する態度を整頓し、闘志を調査して革命に対する意志を整頓する、という三つである。各自は自らの思想、生活と仕事に結びつけて、批判と自己批判を行う。そのうえでそれぞれ長所を発揮し、欠点を克服する」<sup>36)</sup>。この運動において、日本人は自らの雇われ人根性を反省することを重点にした。

こうした活動を通して、日本人医療要員の多くは単純な被雇用者から革命軍隊の自覚的な戦士に変わり、思想上の変化は顕著であったという。そのなかの優秀者は中国人と同様の信頼と重用を受けた。例えば、前記の元木和男は模範として表彰されるとともに、A医院の事務長に昇進した。彼は劉御院長の命令を受けて医院の本部で会計を統轄し、何百萬元にもものぼる多額の現金を管理していた。これは信頼の高さを示した事例である<sup>37)</sup>。

1948年9月、東北解放軍の東線衛生部は軍医院の日本人の変化について次のようにまとめた。

「各種の講義と政治活動を通して、この2年間に於いて、日本人は非民主的な思想を徐々



に減少させ、民主的な思想を初歩的に築いた。そして、反動、反革命的な思想と狭隘な民族思想も徐々に克服し、初歩的な思想闘争を展開した。そのため、仕事に対する意欲と創造力は高まっている」<sup>38)</sup>。

ちなみに、東線衛生部はこの報告と同時に所属の13の医院で働いている日本人の人数を再統計した。それによると、東線衛生部所属軍医院の日本人は1948年9月の時点で1779人おり、そのうち、実力で第三位の位置にあるA医院（当時、第29後方医院）には259人がいたのである<sup>39)</sup>。

## 6. 遼瀋戦役と「満員入関」

1948年9月、東北人民解放軍は遼瀋戦役<sup>40)</sup>を発動した。林彪ら指導部は70万人の兵力を動員し錦州、遼西、長春という三方面に配置したほか、150余万人の民間人を後方支援に当たらせた。

このような大規模な戦役に合わせて、東北人民解放軍の後勤衛生部は20の軍医院を動員した。それにしがつて、A医院は遼西地方への移動を命じられ、全員が山城鎮から列車で出発した。途中、彰武の鉄道橋が破壊されたため、全員は徒歩で二つの砂漠地帯を含む300キロを行軍し、韓家店に至った。この間、「日本人同志は極端な苦しみをよく堪え忍んだ。ある日本人炊事係は大きな行軍鍋を背にしたまま肩で箱を担いだ。女性の日本人同志も同じく、重い荷物を担いで辛さを耐えて前進し、時間と競いながら仕事に努めた。誰ひとり決して悲鳴を上げなかった」<sup>41)</sup>。

遼瀋戦役の激しさに加えて、多数の軍医院が指定の位置への到着が遅れたこともあり、医療救護は空前の緊張にさらされた。短期間に一万人を超えた負傷兵が数少ない医院に一気に運ばれて来たため、各医療隊に重圧をあたえた。衛生部は「あらゆる村に医院を、あらゆる家に病室を、あらゆる人が介護を」というスローガンのもとで救護活動を展開した。A医院では副院長の李磊が三つの手術チームを率いて清河門に赴き、あるラマ廟を借りて、昼夜兼行で働いていた。「日本国籍の看護長は四六時中各病室を巡視していた。重傷者の命を救うために、多くの日本人が中国人と同様に積極的に献血し、愛国主義と国際主義の精神を十分に示した」<sup>42)</sup>。

遼瀋戦役は52日間にわたって戦い、11月2日に終了した。東北人民解放軍は69000人の死傷者という代価を払って47万人の国民党軍を殲滅し、全東北を解放した。毛沢東と中共中央軍事委員会は、共産党軍は十分に休息しなければ関内へ進軍できないだろうという国民党側の誤った判断を利用して、東北人民解放軍に速やかな関内進軍を命令した。これにしたがつて、東北人民解放軍の主力は11月23日から関内へ向けて進軍し始めた<sup>43)</sup>。

しかし、関内進軍の過程で解放軍に大量の脱走兵が出た。1949年1月1日、林彪らは次のように毛沢東に報告した。「出発から今日まで、全軍の脱走兵は12700人を超え、隊列から落伍した兵は3200余人にのぼり、二者を合わせると15000人前後だ」<sup>44)</sup>。

こうした非常時期にあつて、東北解放軍の日本人にも「享樂を求める気持ちが起こり、東北の都市生活に憧れ、前線での仕事を嫌い、復員や病氣療養を要求する人が現われた」<sup>45)</sup>。このような入関作戦を嫌う傾向に対して、A医院の上層部は「満(全)員入関」という政治動員を展開した。入関作戦に対する日本人の抵抗の理由は、親戚や友人が東北にいたり、関内は未知の土地であること、日本への引き揚げがいつそう困難になることなどにあつた。それに対して、A医院は軍指導部の関係文書の学習や会議での思想動員のほか、個々の会話などを通じて、全中国の解放を目指す革命を最後までやり抜くという信念を徹底させた。この教育が奏効し、A医院は文字通り「満員入関」を実現した。それが模範となつて東北人民解放軍の各医療機関により影響を与えたので、A医院は軍の指導部から高く評価された<sup>46)</sup>。

## 7. 職位の評定と新米中国人医療者に対する指導

1948年12月19日、遼寧省阜新の韓家店から出発したA医院一行は河北省の唐山に到着し、平津戦役<sup>47)</sup>での救護任務に従事した。翌年1月6日、一行は唐山を離れ天津以南の独流鎮へ南下した。14日、劉亜楼が指揮した東北人民解放軍の一部は天津攻撃戦を発動し、29時間の激戦を経て、国民党の天津守備軍13万人を殲滅した。東北人民解放軍も23000人の死傷者を出したが、A医院はそのうちの4000人余の負傷兵を受け入れた。それを治療する四つの手術チームの中、三つは日本人が主な担当であつた。彼らは昼夜を問わず救護に努めた。山田守医師は重い胃病にかかっているが、看護婦の手助けを受け薬を飲みながら負傷者の手術を続け、やっと手術を終えるとすぐに病室を巡視しに行くという日々を繰り返した。また、日本人の看護婦は負傷兵を治すために、僅かな手当の中から卵や果物を買ってやったりした。負傷者が次々と送りこまれたため、消毒用の材料が足らなくなつてしまつたが、消毒担当の岩本は簡便な高圧消毒法を発明し、問題を解決した<sup>48)</sup>。そのほか、多くの日本人は積極的に負傷者に献血した。当時の困難な状況のもとで、献血をしても十分な栄養をとることができず、豚肉を一回食べただけで好運と見られるほどであつた。それにもかかわらず、日本人は泣き言も言わずに献血を繰り返した<sup>49)</sup>。

平津戦役が終了した後、東北人民解放軍は南下作戦の準備に入つた。1949年1月30日、軍の衛生部は各後方医院を三つの医院管理处の下に再編成させることを決定した<sup>50)</sup>。それを受けて、3月にA医院は「第29後方医院」から「第9後方医院」に再び改名され、第2医院管理处の所轄となつた<sup>51)</sup>。改名後のA医院は四つの医療所を持ち、1000病床を擁し、所属要員は800名を超えた。

3月11日、東北人民解放軍は「中国人民解放軍第四野戦軍」と改名されたが、13日、A医院は独流鎮から出発し、8つの船に分乗して大運河を利用して南下し始めた。行軍の速度を速めるため、全員が10人ずつのグループに分かれて、交代で岸で船を引いた。十数日後、山東省臨清県に着き、そこからトラックに乗り換え、河南省開封市にたどりつき、そ

こからさらに汽車に乗り換え、鄭州の須水鎮に着き、休息と学習活動に入った<sup>52)</sup>。

須水鎮での休息期間において、全員が中国共産党7期2中全会の文献を勉強し、「全中国を解放し、革命を最後までやり抜く」という思想教育を受けた。これと同時に、A医院の職員に対し軍における階級と職位の評定が行われた。評定の方法は、まず一人ずつ軍における自分の経歴、人柄、活動に基づいて自分で自分を評価し、そして皆でお互いにそれぞれの自己評価を議論し合い、一人ずつ階級と職位を定める、ということであった。医院は団（連隊）級部門なので、院長と政治委員は団長（連隊級）クラスである。所属の四つの所は營級部門なので、所長と指導員は營長クラスである。その他、看護師は排長クラス、雑務係は兵士である<sup>53)</sup>。

1946年夏に入隊した近藤武雄は、もともと日本陸軍医院の外科医で、通化事件<sup>54)</sup>の時には関与を疑われたこともあった。共産党の軍医院に入隊した後も彼は旧式の慣習を持ち、患者と看護師に威張っていたという。しかし、医院での諸教育の結果、彼は遼瀋戦役とその後の戦闘において、昼夜兼行で丁寧に手術に当たり、多くの負傷者の命を救った。そのため、今度の評定において、彼は副所長の職位に昇進し、副營長の階級と定められた。他方、看護長の金子は連級に昇進した。このように、日本人の多くは正式に中国共産党軍の将校となった。もちろん、「官、兵一致」という当時の条件においては、階級が異なっても待遇には大差がなかった<sup>55)</sup>。

須水に駐留した間、A医院は中国人の看護師を募集したが、これら新米への指導を主に日本人が担当した。短期看護訓練班を出たばかりの張文徳はこの時期に看護師として採用されたのであったが、彼は次のように回想する。「日本人同志は知識が豊富で、技術に精通しており、指導もたいへん熱心であった。例えば、注射を教えてもらうとき、日本人の看護師は要領を繰り返して説明するとともに、自分の腕を差し出して我々に注射を練習させた。その際、日本人の看護師は血を流しても痛いとも言わず、面倒なことを嫌がらずに教えてくれた。私は短気なので、時々負傷兵にむっとすることがある。日本人の同志はそれを見るたびに私を注意してくれた。そこで、外国人である日本の同志でもこんなに中国人の負傷兵に思いやりを与えているのに、まして中国人である私が、と思い直して、自分の悪い癖を改めた」<sup>56)</sup>。

## 8. 南下作戦期の試練

1949年4月7日、第四野戦軍が「出動命令」を発した。それにしたがって、華北に駐留した部隊は第2、第3野戦軍とともに渡江戦役を発動した。A医院も須水から出発し、汽車、トラックを乗り継いで湖北省漢口に近い紅房子というところに着いた。6月、軍の進撃につれて、A医院は漢口から汽船で長江に沿って沙陽に、そして9月からさらに南下し、10月に辰溪県に達し、1950年3月までそこに駐在した<sup>57)</sup>。

辰溪に駐在した期間、A医院は厳しい試練を受けた。まずは江南地方の酷暑がもたらす

多数の患者であった。東北から南下してきた兵士は戦闘の辛酸に加えて、南方の気候に合わず、数多くの人々が熱中症やマラリア、下痢、胃腸炎などで倒れた。A医院を含む六つの軍医院は10702人の患者を受け入れ、傷病者総数の70%を占めた。「大幅な入院超過とともに、3割ほどの医療関係者本人もマラリア、下痢などにかかっているので、医院の混乱と緊張は想像を絶した」<sup>58)</sup>。A医院は3080人の傷病者（主に南方多発病の患者）を治療したが、日本人スタッフの多くは自身の病からの苦痛を押して仕事していた。「多くの日本人は僅かな給料から、アイスクャンデーや氷を買って高熱の患者の解熱に用いた。重態の患者に対してはいっそう力を尽くした。患者の呼吸が停止した後も、口で人工呼吸に努めた」<sup>59)</sup>。

2番目の試練は匪賊による襲撃である。『中国人民解放軍第四野戦軍戦史』によると、「歴史的な要因により、中南地方の6省において、湖南省の匪賊による被害は比較的にひどい。国民党の地方武装勢力も含めて、湖南省に約18万人の匪賊が活動していた。そのなか、百人以上の匪賊のグループは370余ある」<sup>60)</sup>。解放軍が進駐した後、匪賊は様々な方法で解放軍を襲撃し、とくに武装力の弱い軍医院などを標的とした。A医院は匪賊と戦いながら傷病者の救護に努めなければならず、手に汗を握る日々の連続であった。緊急な場合では、日本人男性が軽症者ととともに武器をとって戦闘に加わったのである。その生々しい場面はいまも多くの当事者の脳裏に焼き付いている<sup>61)</sup>。

## 9. 中華人民共和国成立後

A医院の南下作戦中の1949年10月1日、中国共産党は北京で中華人民共和国の成立を宣言した。1950年に入ると、南方を中心とする全国解放戦争は全面的な勝利を迎え、台湾とチベット以外の全てを新政権の支配下に置いた。

平和の到来に伴って、中国革命の重心は「旧中国の解放」から「新中国の建設」に移った。1950年4月1日、第四野戦軍衛生部は「医院整理、編成についての指示」を出し、「戦時の集中から戦後の分散配置へ、流動から固定へ」ということ<sup>62)</sup>を方針に、軍の所属医院の併合と削減を始めた。これを受けて、A医院は鉄道公安軍第19師に配属され、正規の解放軍系統の所属医院としての歴史を終えた。

これに伴って、A医院にいた日本人の中、第2、3、4所に所属した人は鉄道公安軍第19師によってさらに民間の水利、農林、工業などの医院に転勤させられ、第1所所属の49名だけは医務科長衛希武の引率で第1所の他のメンバーとともに北京に移動して、公安軍の医院を創り、そこで働くことになった。1952年以後、一部の日本人はこの公安軍の医院から復員して山西省の太原総医院に移動させられた。

当時、新中国政府は日本との国交樹立を希望していたが、日本政府は台湾に逃れた国民党政権を「中国政府」として承認したので、日中両国は不正常な関係にとどまった。そのため、新中国に残留している日本人の帰国問題について、中国側は赤十字を通して日本側

と交渉しなければならなかった。1953年1月、日本の日中友好協会、平和連絡委員会と赤十字の合同訪中代表団が中国を訪問し、残留日本人の帰国問題をめぐって中国側との交渉を始めた。中国側は周恩来首相と廖承志氏の指導下で、中国赤十字会会長の李徳全を代表に、伍雲甫、趙安博、孫平化、肖向前らをメンバーとする交渉団を組んで折衝にあたった。3月22日、日本の「白龍丸」が天津の塘沽港に到着し、残留日本人が帰国し始めた<sup>63)</sup>。

種々の原因により、中国側の交渉団は東北解放軍で活躍したことがある日本人医療関係者らの具体的な身分を知らなかった。他方、日本帰国後の生活に配慮して、中国の軍当局も守秘に努めた。例えば、ある看護婦の場合は次のようであった。「1953年5月、上司から帰国してもよいと言われた。中国で長年生活していたので、仲間の一部には部隊への愛着が生まれ、日本に帰ることを躊躇するものもあった。私は家族が日本にいたので、帰国を希望した。人民解放軍での経歴を暴露されないように、上層部は文書による手続きを一切行わなかった上、軍から授与された我々の表彰メダルも回収し、軍の制服を民間の服に着替えることを命じた。さらに、6か月分の給料を香港ドルで支給してくれた。敗戦後の苦しい経済状況にある日本人にとって、これは大金である。我々は天津で集合し、船に乗って帰った。中国での生活はこれによって終わった」<sup>64)</sup>。

中国の中南地方に残ったA医院の日本人医療関係者は上海から帰国したのである。

## 終 わ り に

1945～1953年の8年間、A医院で活躍した日本人の多くは手柄を立て、表彰された。不完全ではあるが、劉御院長の統計によると、山田守医師は小功1回、大功1回、金子は小功2回、大功1回、鈴木雅子は小功1回、二等功2回、有木、田口庄吉、鈴木武子、大塚登、高橋貞夫、元木和男、佐藤らはそれぞれ大功を立てた<sup>65)</sup>。そのうえ、A医院の日本人全員は人民解放軍から、1949年の「東北解放紀念章」、1950年の「華北解放紀念章」と「解放華中南紀念章」の表彰メダルを授与されたのである。また、彼らの歴史的功績を讃えるため、1986年以降、中国人民解放軍総政治部は彼らに「解放獎章」を授与した<sup>66)</sup>。A医院での日本人の事例は一縮図に過ぎないが、中国革命に対する日本人医療関係者の貢献の全般はそこによく象徴されていると思われる。

1956年、中華人民共和国の周恩来首相は日本からの訪中団に次のように語りかけた。「我々は一部の日本人に深く感謝している。中国の解放戦争期において、彼らは医師や看護師、技術者として協力してくれた。これは日本人民と友好関係を結びたいという我々の信念をいっそう強めた」<sup>67)</sup>。

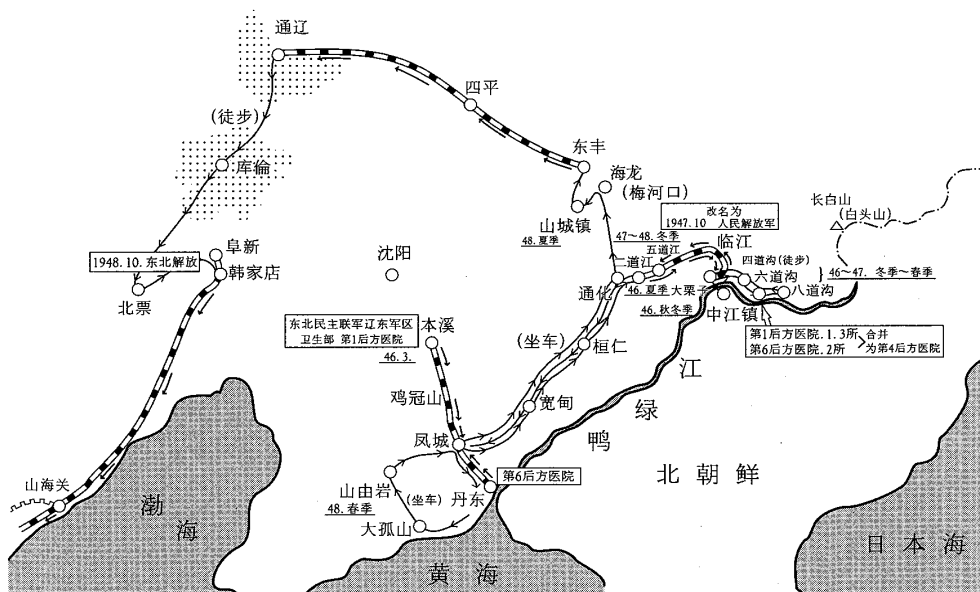
周恩来首相がこうした発言を行った当時、一般の中国人は本稿に示したような事実を知らされていなかった。周恩来による感謝の理由を理解できなかったと考えられる。しかし、こうした事実が中国においても公表され始めた今日、一般の中国人の中にも、周恩来の発言に共鳴する人が増えていくのではないかと筆者は考えている。

[付記 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)(課題番号14402010)による成果の一部である。作成にあたって、劉同教授、山極晃教授と同僚の別枝行夫教授より貴重なご教示を頂いた。記して深謝申し上げる。]

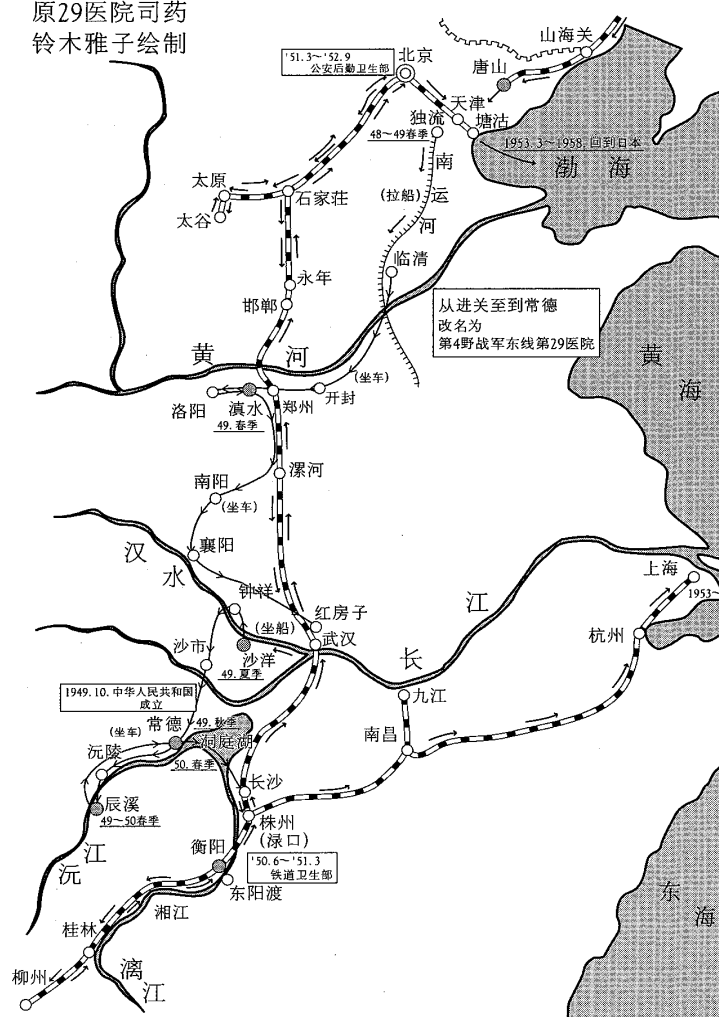
付録1 略年表

1945年5月31日	毛沢東、中国共産党第7回全国代表大会で東北地域を勝ち取ることを指示。
1945年8月8日	ソ連軍、対日参戦に伴って、日本支配下の「満州国」＝中国の東北部に進軍
1945年8月14日	日本、無条件降伏を通告
1945年8月中旬	中国共産党軍、東北への進軍を開始
1945年10月31日	東北に進軍した中国共産党軍、林彪を総司令とする「東北人民自治軍」として再編成。
1946年1月14日	東北人民自治軍、「東北民主聯軍」に改名
1946年3月	A医院、東北民主聯軍遼東軍区衛生部第1後方医院として発足
1946年6月16日	中国共産党中央、林彪を東北局書記、東北民主聯軍総司令に任命した上、林彪、彭真、羅榮桓、高崗、陳雲による中国共産党東北局常務委員会の設立を指示。
1946年6月26日	国民党軍と共産党軍の全面的な内戦が勃発。
1946年9月9日	東北民主聯軍総衛生部政治部、「關於目前緊急工作的指示」により、日本人医療要員に関する政策を決定。
1947年1月15日	林彪、「告負傷指戦員書」により六カ条の規律を命令
1948年1月1日	東北民主聯軍、「東北人民解放軍」に改名
1948年5月	A医院、「第1後方医院」から「第29後方医院」に改名
1948年9月～11月	遼瀋戦役
1948年11月～1949年1月	平津戦役
1949年3月	A医院、「第29後方医院」から「第9後方医院」に改名
1949年3月11日	東北人民解放軍、「中国人民解放军第四野戦軍」に改名。
1949年10月1日	中華人民共和国成立
1950年4月	A医院、鉄道公安軍第19師に配属され、正規の解放軍系統の医院としての歴史が終焉。これに伴って、第1所以外の日本人が民間の医院に転勤。
1952年以後	公安軍の医院に残った日本人も復員。彼らを含め、1953年から元A医院の日本人は帰国を開始。

付録2 経過図（鈴木雅子作成 出典：『資料選編』786—787頁）



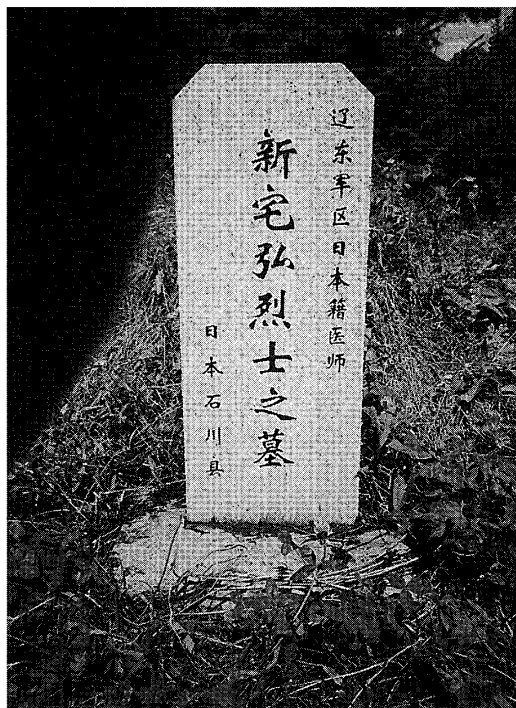
原29医院司药  
铃木雅子绘制



付録3 写真









## 注

- 1) この部隊の正式な名称には変化が多かった。概要は付録の略年表を参照されたい。
- 2) 最近の例として、日本側では、NHK「留用された日本人」取材班『「留用」された日本人——私たちは中国建国を支えた』に、「医師、看護婦、傷病兵を運ぶ担架係など、およそ3000人が『留用』され、共産党軍とともに行動した」という説がある（日本放送出版協会、2003年5月、第2章、80頁）。中国では、「1945年から1946年にかけて、4000人以上にのぼる日本人が通化、渾江、興城、錦州、本溪などから次々と集められ、東北民主連軍の後方勤務部門の仕事についた」という説があるが、言うまでもなく、ここの「後方勤務部門」には医療関係以外のものも含まれる（中国中日関係史学会編『友誼鑄春秋——為新中国做出貢獻的日本人』、北京、新華出版社、2002年。同書の日本語版は、武吉次郎訳『新中国に貢献した日本人たち——友情で綴る戦後史の一コマ』、日本僑報社、2003年10月。前記の引用は日本語版第5章「第29後方病院の群像」、297頁による）。なお、両説とも根拠を示されていない。
- 3) 「日本人管理委員会の成立経過及今後工作計劃」（未公刊）による。筆者注：進行中の調査研究のため、種々の事情により、出典は調査研究終了後の著書に明記することを了承されたい。以下、「未公刊」と記した資料は同様である。
- 4) 賀誠（東北軍区衛生部長）「在新形勢下の衛生工作」（1948年1月29～31日に行われた東北軍区衛生会議での報告）を参照。高恩顕主編『中国人民解放軍第四野戦軍衛生工作史資料選編』、北京、人民軍医出版社、2000年3月（以下本書は『資料選編』と略称）、177～203頁。
- 5) 孫炳華（当時、東北民主連軍総後勤部衛生部副部長）「回憶遼東軍区衛生工作」（1996年7月15日）、『資料選編』、692頁。
- 6) 同上。

- 7) 前掲賀誠報告を参照。
- 8) 遼東軍区第2後方医院で働いた新井侃医師は、東北民主聯軍の指揮官が日本人との最初の会合で、「日本人は我々と朋友であり、我々と同じように日本のファシストに苦しめられた。中国はすべての面で遅れている。その我々のために是非協力してほしい」と要請したことを回想録の中で紹介した（「敗戦の混乱」、長城会誌特集号『長城を超えて』、1976年7月、6頁）。
- 9) 前掲孫炳華「回憶遼東軍区衛生工作」にこれら新設軍医院の前身と新設後の指導体制についての紹介がある。また、前記新井侃の回想録にも言及があった（長城会誌特集号『長城を超えて』、10頁）。二者の記述を併せて読む必要がある。
- 10) 前掲新井侃の回想文、10頁。
- 11) 前掲賀誠報告、『資料選編』、179頁 注：（ ）内は引用者注、以下同様。
- 12) 陳雲より孫儀之宛書簡（1947年6月18日）、『資料選編』、64頁。
- 13) 広田斐子「在解放軍的日子里」、『宝鶏文藝』中日友好専号（1993年）、10頁。筆者注：この「中日友好専号」は元A医院で働いた日本人と中国人の回想録を中国語で出版したものである。日本人の回想録は元々日本語で書かれたのだが、筆者はそれを入手できなかったので、本稿での引用は、中国語に訳されたものを筆者が日本語に再翻訳したものである。二重の翻訳を経たため、表現上日本語原文と一致しない点があることを了承されたい。なお、以下、『宝鶏文藝』中日友好専号を『専号』と略称する。
- 14) 本研究プロジェクトの協力者である劉同によるインタビュー記録（2002年10月7日）。
- 15) 門屋敏夫「参加中国革命」、『専号』、9頁。
- 16) 高橋貞夫「命運把我和中国連在一起」、『専号』、5頁。
- 17) 衛希武の回想によると、安達仁次郎の事例はこれにあたる。彼は南満医科大学を卒業した医学博士で、1945年に一家9人を率いて、華北の中国共産党根拠地に身を投じたという。衛希武「一張珍貴照片牽起的回憶」、『専号』、23頁。
- 18) 前掲孫炳華回想文、『資料選編』、694頁。
- 19) 前掲孫炳華回想文、『資料選編』、695頁。
- 20) 前掲高橋貞夫回想文による要約。
- 21) 『長白会会報 第17回広島総会』、『長白会会報 第18回山形総会』を参照。なお、中華人民共和国が誕生した後、彼らの遺骨は六道鎮にある臨江烈士陵园に移された。付録2の写真を参照。
- 22) 前掲門屋敏夫回想文。
- 23) 前掲新井侃回想文、11頁。
- 24) 元木和男「自己批評」、『専号』、17頁。
- 25) 沢田富「長白山」、『専号』、7頁。
- 26) 元看護婦の沢名子も回想録で自分のそうした経験を記録した。「1946年、部隊が一時北朝鮮の中江鎮周辺に撤退した。私たち医療関係者も負傷兵をつれて部隊とともに行動した。その際、一ヶ月後に部隊が再び中国本土に戻るということを知った。だとすると、再び日本を遠く離れることになるのではないかと、むしろ逃げたほうがいいのではないかと、7人の日本人と一緒に医院から脱走した。しかし、2時間後に北朝鮮の保安に逮捕され、牢屋に入れられた。翌日、部隊の人が来て、私たちを厳しく叱ったうえ、連れ戻した」。『専号』、15頁。
- 27) 詳細は、東北民主聯軍総衛生部政治部『關於目前緊急工作任務的指示』（1946年9月9日）を

- 参照、『資料選編』、16－18頁。
- 28) 前掲賀誠報告、『資料選編』、178－179頁。
- 29) 林彪「告負傷指戦員書」(1947年1月15日)、『資料選編』、25頁。
- 30) 『資料選編』、26－27頁。
- 31) 前掲賀誠報告、『資料選編』、178－179頁。
- 32) 民族幹事には延安の「日本労農学校」出身者の存在があるとの指摘もなされたが(前掲『「留用」された日本人』第2章を参照)、A医院では院内の日本人から選ばれた民族幹事が多い。例えば、担架係として医院の仕事を始めた高橋貞夫など。
- 33) 例えば、広田斐子はある日「君たちは日本の鬼子だ」と一人の負傷兵に言われたが、病室の人はただちに、「そんな言い方はやめなさい。彼らも中国の革命に奉仕する同志だ」と、彼を厳しく注意した。この事件の後、日本人も政治学習と医療知識学習に対する熱意を起こした。また、阪井光子は従軍中、3回も大きな病気に倒れたが、中国人同僚による行き届いた看病で立ち直ることができた。なお、木神原が腹膜炎にかかった時、中国人院長は彼の手術が終わるまでそばで彼の手を握って励ました。手術を担当した山田守医師は、これは日本軍の中では想像もできないことで、木神原はそのおかげで救われたと後に述懐した。参照：前掲広田斐子回想文のほかに、山田守「永久的記憶」、阪井光子「難忘的歲月」、『専号』、3頁；12－13頁。
- 34) 劉御、李磊「第9後方医院簡介」、未公刊。
- 35) 劉御「第9後方医院的日本朋友」、『資料選編』、752頁。
- 36) 同上。
- 37) 前掲元木回想文。
- 38) 東北野戦軍東線衛生部「対日本人進行工作的一般狀況」(1948年9月)、未公刊。
- 39) 内訳：医師9人、医師助理5人、看護婦65人、看護師64人、雑務係84人、その他15人、家族17人。東北野戦軍東線衛生部「対日本人進行工作的一般狀況」(1948年9月)、未公刊。
- 40) 中国東北部の長春、瀋陽、錦州地区を戦場に行われた東北人民解放軍と国民党軍との決戦。
- 41) 前掲劉御院長の回想、『資料選編』、755頁。
- 42) 李磊「勝利的喜悅 戦闘的友誼」、『専号』、20頁。
- 43) 第四野戦軍戦史編写組『中国人民解放軍第四野戦軍戦史』、北京、解放軍出版社、1998年、374頁。
- 44) 林彪らより毛沢東宛電報稿(1949年1月1日)、未公刊。
- 45) 林彪らより毛沢東宛電報稿(1949年1月1日)、未公刊。
- 46) 第四野戦軍後勤部衛生部「南下以来立功運動総結」(1949年8月)、未公刊。
- 47) 北京(当時、北平)、天津地区を中心に展開された東北人民解放軍と国民党軍の決戦。
- 48) 前掲劉御院長回想文、『資料選編』、755－757頁。
- 49) 前掲門屋敏夫の回想。
- 50) 詳細は、第四野戦軍衛生部「南下準備工作総結」(1949年5月)、『資料選編』、522－527頁。
- 51) 「第四野戦軍後勤部公布整編医院番号的命令」(1949年3月30日)、『資料選編』、506頁。
- 52) 前掲李磊回想文、『専号』、20－21頁。
- 53) 劉同による劉御、李磊へのインタビュー記録(2002年8月21日)。
- 54) 1946年2月に、共産党支配下の吉林省通化市で発生した反共産党暴動事件。中国では国民党地

下勢力と旧日本軍人の結託による事件と言われている。

- 55) 劉同による劉御、李磊へのインタビュー記録（2002年8月21日）。ちなみに、看護師の給料は豚肉2500キログラムの価格に準じるもので、当時の貨幣では2元に相当するという。
- 56) 張文徳回想文「和日本朋友相处的日子」による要約、『専号』、27頁。
- 57) 劉御、李磊「第9 後方医院簡介」、未公刊。
- 58) 高文顯主編『中国人民解放军第四野戦軍衛生工作史』、北京、人民軍医出版社、2000年3月、157-158頁。
- 59) 前掲李磊の回想。
- 60) 前掲『中国人民解放军第四野戦軍戦史』、653頁。
- 61) 劉同による劉御、李磊へのインタビュー記録（2002年8月21日）。なお、永吉秀嗣「珍藏在心  
中的往事」、『専号』、14頁。
- 62) 第四野戦軍兼中南軍区後勤衛生部「關於医院整編建設的指示」、1950年4月10日付『中南衛生』  
（筆者注：中南軍区の内部で発行された新聞）。
- 63) 高梁「不能忘却的歷史情緣——回憶49年前我国協助日僑回国的前後」、2002年6月13日付『参考  
消息』。
- 64) 劉同によるインタビュー記録（2002年10月7日）。
- 65) 前掲劉御院長の回想。なお、「大功」、「小功」は中国人民解放军の表彰制度の一種で、日本語  
の「一等賞」、「二等賞」等の意味に近い。
- 66) これは1955年に中国の解放戦争に参加した軍の連級以上の将校に与えたものであるが、当時、日  
本人関係者が帰国したので、授与されなかった。
- 67) 前掲『中国人民解放军第四野戦軍戦史』、141頁。

キーワード 解放軍 日本人 留用 徴用 医療

(2002年冬初稿、2003年夏完成稿)

(LU Xijun)